日本看護学教育学会第 28 回学術集会 ナーシング・サイエンスカフェ
広報・渉外・社会貢献委員会報告

看護ってどんな仕事?−高校生による看護研究発表−

日時:2018 年 8 月 28 日(火))14:00〜15:20

場所:パシフィコ横浜 第 5 会場(418)

一般社団法人日本看護学教育学会第 28 回学術集会での、ナーシング・サイエンスカフェは、神奈川県内の3校の高校生の方々をゲストスピーカーとして迎え＜これからの看護について考える＞ということを主旨に、高校生からの視点で看護について発表していただくと いう企画でした。当日は、約 50 名の方が参加してくださいました。

神奈川県立二俣川看護福祉高等学校の 3 名は、「看護師をめざして」というテーマで、1年生を対象にアンケート調査を行い看護師になりたいと思った時期やきっかけ、めざす看護師像など非常に興味深い結果を報告してくれました。また、看護について各学年がどのような学習を行い、学んでいるのかということについて看護に対する認識の変化とともに発表し、最後に発表者一人ひとりが抱く看護に対する思いを語ってくれました。自分自身の言葉で語ってくれたその内容に感心し、聞き入ってしまいました。

コメンテーターは、横浜市立大学の看護教員であり、がん看護専門看護師の渡邉眞理先生と、国家公務員共済組合連合会 横須賀共済病院の皮膚・排泄ケア認定看護師の慶貴子先生でした。発表に対し、看護師になりたいという気持ちが幼稚園の頃からあったということに驚き、なりたい看護師像が「優しい看護師」だけではなく「信頼される看護師」と発表されていたことが素晴らしいこと。実習では、看護師をよく観察し、経験をしたことから学んでおり、将来一緒に働きたいと思える内容であったというコメントでした。

神奈川県立横須賀高等学校の 5 名は、「感染予防のための技術『手洗い』」をテーマとして、1年次に行った研究を継続して、さらに内容を深めた発表をしてくれました。健康な大学生が感染症で死亡したり、季節外れのインフルエンザが蔓延したりしているというなどのニュースから感染症が自分たちの身近な問題であると実感したことが学習動機でした。このことから自分たちの生活について「手洗い」という視点から「日常生活の中で無理なく実行でき、効果的な手洗いを調べる」という目的を設定し、研究を行い最も効果的な手洗い方法について提案をしてくれました。

コメンテーターの先生方からは、感染については医療従事者にとっても関心があるテーマで、高校生にとっても身近な日常生活動作である「手洗い」という点に着眼していてよかった。高校生活の中で効果的な手洗いを調べ、手を洗った後に何で手を拭いているのかについても、髪の毛や放置タオル、スカート、自然乾燥など高校生ならではの視点だった。応用できる、現実的な研究であったのが良かった。今後の結果をさらに発展させ、手洗いの啓蒙活動に繋げてくれることを期待しているとのコメントでした。
また、手洗いの時間については、森のクマさんの曲の長さを目安にすると良いこともコメンテーターの先生から教えていただき、和やかな雰囲気で手洗いについて考える時間となりました。

3校目の神奈川県　私立　横須賀学院高等学校の6名は、「普通の高校生が『看護師』という職業を意識するとき」というテーマで発表をしてくれました。ごく普通の高校生が看護師などの医療専門職を目指し、その意志を保ち、現実に向けた行動をとる中で、どのような変化が生徒の内側に起こっているのかを明らかにするという内容でした。看護師に求められる実践能力と誤認を含んだ固定概念について、実習参加前後でスコアの変化をみるという＜定量分析＞と医療系実習参加前後での感想の変化をみる＜定性分析＞を行うという内容でした。

コメンテーターの先生方からも、本格的な研究であったことに驚いた。特に実習体験からの「私にとっての Before /After」の語りは良かった。「看護師になることがゴールなのではなく、看護師になってからがスタートであるという」という言葉が印象に残った。「克服すべき固定概念」という項目は、自分たちも考えるきっかけとなったというコメントでした。

意見交換の時間では、「看護についての理解促進のための教材開発」「看護師をめざすきっかけ」などについての質問がありました。回答の難しい内容については、サポートをしていた教諭が代わりに対応するという、高校生・コメンテーター・参加者・引率教諭というその場にいた全員がこれからの看護について考える時間となりました。

「伝えたいことを相手に伝わるように工夫する」「個別的なケア」「学び続ける姿勢」「学びを通して自らの成長を実感し、次のステップに繋げる」「コミュニケーションの重要性」「ケアする力の多層性」などの言葉が高校生から表現された時、看護という仕事に対し真摯な姿勢で向き合っている高校生達の姿に心が震え、看護に携わっている一人ひとりが自分たちの仕事について、これからの看護を担ってくれる人たちのために今、何をなすことが望ましいのか・できるのかということについて考える貴重な時間となりました。

最後に、佐藤紀子理事長より、優秀発表賞として、発表をしてくれた3校に対し表彰状が授与されました。

会場参加者からのアンケートの結果は、以下の通りです。全般的に満足度が高く、会場参加者も初心にかえり、感動し学ぶ機会が多かった講座であったことが伺えました。

表1　参加者の所属 n=34

所属	人数	%
高校生	0	0%
保護者	0	0%
教員	17	50%
その他	14	41%
無記入	3	9%

表2　講座内容の満足度

講座の内容	人数	%
満足	21	68%
まあまあ満足	7	23%
あまり満足しなかった	0	0%
満足しなかった	0	0%
無記入	3	10%

表3　参加しての感想(自由記載)の抜粋

高校生の声が聞けて良かった。良い企画と思いました。
フレッシュな高校生の声を聞けて自分の若い時の看護師を目指していた頃の気持ちを思い起こし、幸せな気分になれました。たくさんの学生さんが看護職を目指してくれたら嬉しいと感じました。
高等学校の皆さん本当にすごい！看護学生に聞かせたいと思いました。日本の看護の未来は安心！と思える発表でした。看護師になって30年以上になりましたが、改めて思い出しました。今も昔もNSになりたい気持ち、同じような思いなのだと感じました。
しっかり内容をまとめていて説明がなされていたので分かりやすかった。
高校生が高校生の視点で文献を調べたりまとめたりしていることのクオリティが高いのにびっくりしました。すばらしかったです。
どの高校も素晴らしかった。司会の先生、コメンテーターの先生もとても良いコメントをされていて勉強になりました。
消毒液を使ったらどれくらいコロニーを減らせるのかも知りたいと思った。
学習者が興味を持つことが自ら主体的に学んでいく上で重要だと改めて考えられた。
大学教員という立場としてナーシング・サイエンスカフェの重要さを体験することが出来ました。我々大学で勤務する者がいかに高校の生の声を聞いていないのだと反省した。

今回のナーシング・サイエンスカフェでは、参加した一人ひとりが「看護の仕事とは何か」という問いの原点に立ち戻ることができたと思います。そして、将来が楽しみな高校生達に出会え、近い将来、ともに看護の道で協働できる日が訪れることが楽しみになった機会となりました。

（文責：山之内由美、写真： 津嘉山みどり）

＜広報・渉外・社会貢献委員＞:
任和子委員長(京都大学) 小松浩子副委員長（慶應義塾大学） 内藤知佐子(京都大学医学部附属病院)
清水安子(大阪大学) 山之内由美(松下看護専門学校) 津嘉山みどり(大浜第一病院)
三科志穂(兵庫県立大学) 趙崇来（佛教大学） 宇多雅（京都看護大学）